

TLS 型 SIMO-OFDM 通信環境下におけるチャネル等化に関する性能解析

Performance analysis of channel equalization in TLS type SIMO-OFDM communication environment

片貝 悠[†] 堀内 亮[†] 小松 稔[‡] 田邊 造[†] 古川 利博[‡]
 Yu KATAKAI Ryo HORIUCHI Minoru KOMATSU Nari TANABE Toshihiro FURUKAWA

[†] 諏訪東京理科大学 Tokyo University of Science, Suwa [‡] 東京理科大学 Tokyo University of Science
 E-mail:[†] {jg110016@ed, jgh12612@ed, nari@rs.suwa}.tus.ac.jp, [‡] {komatsu_m@ms, furukawa@ms}.kagu.tus.ac.jp

1 はじめに

本論文は、OFDM 通信方式における全最小二乗 (TLS) 型ダイレクトブラインドゼロフォーシング等化器を提案する。提案手法の特徴は、(1) トレーニング信号を送ることなく等化器を推定可能とし、(2) 雑音の影響を軽減することにより性能が良いことである。

2 問題設定 [1]

SIMO-OFDM 通信システムにおいて、Stacking Number を N と設定したとき、 L 個の全ての観測信号ベクトル $\mathbf{x}_N(n) = [x^{(1)}(n), \dots, x^{(L)}(n), \dots, x^{(1)}(n - N + 1), \dots, x^{(L)}(n - N + 1)]^T$ は [2]

$$\mathbf{x}_N(n) = \mathcal{H}_N \mathbf{s}_N(n) + \mathbf{v}_N(n) \quad (1)$$

と表わされる。ここで、 \mathcal{H}_N は $LN \times (L_h + N)$ の伝送路行列であり、各観測アンテナ毎に L_h 波の遅延波が存在している。また、 $\mathbf{s}_N(n)$ は $(L_h + N)$ 次元の送信信号ベクトル、 $\mathbf{v}_N(n)$ は AWGN の LN 次元雑音ベクトルである。

LN 次元等化器ベクトル $\mathbf{g}(n)$ と伝送路行列 \mathcal{H}_N の内積は

$$\mathbf{g}^T(n) \mathcal{H}_N = [\mathbf{0}^T, 1, \mathbf{0}^T] = \mathbf{e}_{d+1}^T \quad (2)$$

となることが知られている。ここで、 \mathbf{e}_{d+1} は $(d+1)$ 番目のみ 1 で他は全て零となるベクトルであり、 d は任意の遅延パラメータとする。

本論文の目的は、送信信号 $\mathbf{s}(n)$ と伝送路行列 \mathcal{H}_N を知ることなく、ダイレクトに等化器ベクトル $\mathbf{g}(n)$ を推定するために、観測信号ベクトル $\{\mathbf{x}_i(n-j)\}$ の相関行列 $A(n)$ ($Space(A) = Space(\mathcal{H}_N)$) を用いて次式を満足する $\mathbf{g}(n)$ を推定することである。

$$\mathbf{g}^T(n) A(n) = [\mathbf{0}^T, 1, \mathbf{0}^T] = \mathbf{e}_{LN+1}^T \quad (3)$$

3 提案手法

入出力の雑音を改善可能な TLS 法 [3] の考え方を用いれば、式 (3) は

$$(\hat{A}(n) - \Delta \hat{A}(n))^T \mathbf{g}(n) = \hat{\mathbf{e}}_{LN+1} - \Delta \hat{\mathbf{e}}_{LN+1} \quad (4)$$

となる。ここで、 $\hat{A}(n)$ と $\hat{\mathbf{e}}_{LN+1}$ はそれぞれ雑音を含む $A(n)$ と \mathbf{e}_{LN+1} であり、 $\Delta \hat{A}(n)$ と $\Delta \hat{\mathbf{e}}_{LN+1}$ はそれぞれ $A(n)$ と \mathbf{e}_{LN+1} の摂動を意味する。

また式 (4) は、次式

$$\left. \begin{aligned} & \left([\hat{A}^T(n), \hat{\mathbf{e}}_{LN+1}] - [\Delta \hat{A}^T(n), \Delta \hat{\mathbf{e}}_{LN+1}] \right) \begin{bmatrix} \mathbf{g}(n) \\ -1 \end{bmatrix} = \mathbf{0} \\ & [\hat{C} - \Delta \hat{C}] \tilde{\mathbf{g}}(n) = \mathbf{0} \end{aligned} \right\} (5)$$

表 1. シミュレーション緒元

観測アンテナ数	$L = 4$
1 次変調方式	QPSK
搬送波周波数	$f_c = 2.4$ [GHz]
サブキャリア数	$K = 16$
送信シンボル数	20000
伝送路次数	$L_h = 4$
試行回数	50
SNR	0, 2, ..., 20 [dB]

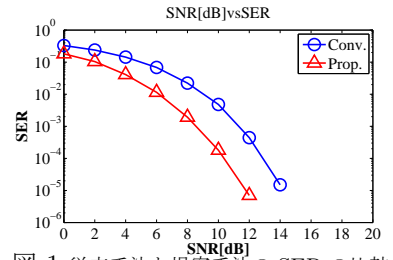


図 1 従来手法と提案手法の SER の比較

と変形できる。ここで、 $\hat{C} = [\hat{A}^T(n), \hat{\mathbf{e}}_{LN+1}]$, $\Delta \hat{C} = [\Delta \hat{A}^T(n), \Delta \hat{\mathbf{e}}_{LN+1}]$, $\tilde{\mathbf{g}}(n) = [\mathbf{g}^T(n), -1]^T$ とする。

以上より、次の最小化問題に帰着することができる。

$$\min \|\Delta \hat{C}\|_F^2 \quad \text{subject to} \quad (\hat{C} - \Delta \hat{C}) \tilde{\mathbf{g}}(n) = \mathbf{0} \quad (6)$$

ラグランジュの未定乗数法を解くことより

$$\begin{aligned} \tilde{\mathbf{g}}(n) &= \frac{\tilde{\mathbf{g}}^H(n) \hat{C}^H \hat{C} \tilde{\mathbf{g}}(n)}{\tilde{\mathbf{g}}^H(n) \tilde{\mathbf{g}}(n)} \\ &= \frac{-1}{\mathbf{e}_{LN+1}^T \mathbf{V}_p \mathbf{V}_p^T \mathbf{e}_{LN+1}} \mathbf{V}_p \mathbf{V}_p^T \mathbf{e}_{LN+1} \quad (7) \end{aligned}$$

となる。ただし、 \mathbf{V}_p は \hat{C} の最小特異値に対する右特異行列である。

求めたい等化器ベクトル $\mathbf{g}(n)$ は $\tilde{\mathbf{g}}(n)$ の $(LN+1)$ 番目の要素が -1 となるように各要素を割ることで算出できる。

4 シミュレーション

提案手法の有効性を確認するために、表 1 に基づき従来手法 [2] と提案手法との性能を比較した結果を図 1 に示す。

図 1 より、提案手法は従来手法よりも優れた SER 評価を得ている。このことは、TLS 法 [3] の導入によって雑音を抑圧して SNR を改善できたことより、等化器ベクトル $\mathbf{g}(n)$ の推定精度が向上したと考えられる。

5 まとめ

本論文では、TLS 法を適用したダイレクトブラインド ZF 等化器を提案した。提案手法の有効性は計算機シミュレーションにより確認した。今後の課題として、演算量の軽減や MIMO 化による向上が考えられる。

参考文献

- [1] 高畑文雄 (編), “デジタル無線通信入門,” 培風館, Jun. 2002.”
- [2] Xiaohua Li and Howard Fan, “Direct Estimation of Blind Zero-Forcing Equalizers Based on Second-Order Statistics,” IEEE TRANSACTIONS ON SIGNAL PROCESSING, VOL. 48, NO. 8, pp.2211-2218, AUGUST 2000
- [3] 和田 清 (監訳), 楊 子江 (訳), 金江春植 (訳), “信号処理のための線形代数,” 森北出版, Janu. 2008.